

40年を超える研究生活を振り返って、改めてその目的を想うと、この一文のタイトルがやはり最も相応しい気がする。研究を始めた動機は「起業」にあったわけではないが、何か新しい物を作りたいという欲求は小学校時代からあり、当時はラジオ少年だった。大学院で研究を始めた当初は人工知能を目指して、その一テーマであった文字認識に憧れたが、机を並べていた先輩に大学としてはもう時代遅れのテーマだと助言を受け、自然言語処理に鞍替えした。「企業が始めた研究を大学の限られた予算と人員でやっても勝てない」と言われた。これは40年以上たった今でも私の脳裏に刻みつけられている。『素人のように考え、玄人として実行する』の著者、CMU教授の金出武雄氏の言である。

当時、自然言語処理の研究をやっていた代表的な研究室は、京都大学と九州大学にあった。大学の研究というものは、それが直接特許に結びつくかどうかには疑問符が付く。分野にもよるであろうが、情報科学のような分野では、大学以外にも大企業の大研究所が控えている。ここは明示的に製品化の研究を行うことを目的としている。大学がこのような目的に特化した研究所と同レベルで競争的な研究をすることは大学の存在意義に馴染まないとは私は思っている。私の始めた自然言語処理は大学においては意味理解のレベルの研究を行っていた。あれから40年、いまだに真の意味理解は製品レベルでは実現できていないと言ってよいだろう。特許の有効期間は20年であるから、大学の研究の特許化することはこの場合は、無意味に近い。しかし、その研究を糧にして企業の研究所は意味処理のほんの導入部——「厚い夏」などの変換を排除する技術——を製品化していった。これが大学の存在意義ではなかるうか。

私は企業入りしてからは、言語処理の階層で言えば、2段階も下の形態素解析を研究テーマとした。かな漢字変換である。当時、計算機への日本語入力は大きな問題となっていた。かな漢字変換はその1つの手段

であるが、当時の計算機の処理能力と自然言語処理の理論では実用化は無理という意見が圧倒的であった。京都大学で形態素解析の試みが行われ、それが九州大学で明示的に「かな漢字変換」というテーマになり、研究が行われていたが、このような最先端すぎてほかに研究者が希薄な状態では、学会が論文に取り上げる意義が薄く、九大の栗原俊彦教授が「採録されない」と嘆くような状況であった。ここに大学の研究の本質が浮き彫りになっていると私は思っている。大学の研究は、このような先進導坑的役割であるのがより良いのではないだろうか。

応
般

【シニアコラム】

IT 好き放題



[No.21]

起業と特許と研究と

私は、当時の形態素解析だけを用いたかな漢字変換技術の上に局所意味分析と名付けた当時の計算機処理能力の許すレベルの意味処理と、当時としては珍しかった学習を導入してかな漢字変換を実用化した。もし、「下手物」と呼ぶ人もいた人工知能の研究が京大で行われておらず、かつ、九大のかな漢字変換の先行研究がなければ、日本語ワードプロセッサJW-10の発明は、私自身が形態素解析から起こさなければならず、さらに数年、いや十年くらいは遅れていたにちがいない。研究には純粋な技術的問題だけではなく、気運というものがあり、論文に取り上げられず、ほかのどの研究機関でもやっていないテーマを始めることはパイオニア精神がなければ成し遂げられないからである。「ほかのどの研究機関でもやっていない」ことはオリジナリティの源泉であるのだが、また、同時に、横並び意識の強い日本では、このことを理由にテーマが潰されるのは珍しいことではない。

今、大学の研究者は特許を取ることを要求され、さらには起業を行うことまで推奨されている。しかし、特許の有効期間が20年に過ぎないことをおもえば、特許は大学の研究のような先進性とは相いれないのではなかるうか。逆に言えば、今、特許として有効になる目先の研究しか評価されないというおかしな現象が起きているともいえるだろう。

(2012年7月17日受付)

天野真家 Shin-ya AMANO

(湘南工科大学)

[正会員] s.amano@m.ieice.org

1973年京都大学大学院工学研究科電気工学専攻修士課程修了。東芝総合研究所を経て湘南工科大学教授。世界初の日本語ワープロ、小型計算機機械翻訳システムの発明・開発。かな漢字変換で発明協会全国発明賞、日本語ワープロで特許庁長官賞、機械翻訳で科学技術庁長官賞。本会理事、代表会員などを歴任。本会フェロー。京都大学博士(情報学)。